

# 別府女子大学紀要

## 第 1 輯 (1951年)

---

西鶴文學に現われた散文性  
東洋的無の現代的展開 ——京都学派とその背後にあるもの——  
ヴァレリイの「海邊の墓地」研究

山 本 平一郎  
津 田 剛  
吉 村 啓 喜

## 第 2 輯 (1952年)

---

窮理通の成立について  
寺崎紫白女 ——蕉門女性作家研究——  
フーフェランドの著書の19世紀日本醫學への影響、特に豊後關係に就いて  
大麥に於ける低三倍体及び其後代の細胞遺傳學的研究  
ウイロビーの魚譜 Historia Piscium と「魚虫禽獸圖」に就いて

佐 藤 義 詮  
松 本 義 一  
辛 島 詢 士  
土 屋 工  
高 山 虔 三

## 第 3 輯 (1953年)

---

一茶と成美  
東九州地方における裝飾古墳  
“L'Idée Fixe”について  
所謂常識界の構造 ——素朴的實在の世界について——  
三浦梅園と佛教 ——一つの覺え書——  
Vernalization に伴う体内水分の消長について

川 島 つ ゆ  
賀 川 光 夫  
吉 村 啓 喜  
津 田 剛  
大 友 芳 雄  
二 宮 淳一郎

第 4 ・ 5 輯 (1954年)

---

田植歌 ——奥の細道研究——

源氏物語の性質について

考古学上より見た上代の宇佐地方(1) 曙期古墳に関する一考察

アメリカ語の歴史的研究概観 (欧文)

ヴァレリイの思想について

児童の代償行動に関する一実験的研究

——特に知能と代償行動との関係について——

東九州彌生式中期土器の一形式

——主として大津式について——

松 本 義 一

大 石 新

賀 川 光 夫

宮 松 治

吉 村 啓 喜

伊 藤 富 美

賀 川 光 夫・佐 藤 暁

※『別府大学紀要』の創刊号は存在せず、『別府女子大学紀要』の第1輯から第4・5輯が刊行されたのち、『別府大学紀要』第6輯として以後刊行が続けられた。つまり、『別府女子大学紀要』から『別府大学紀要』に切り替えられたことになる。なお、『別府女子大学紀要』第1輯から『別府大学紀要』第16輯までは「第〇輯」と表記しており、『別府大学紀要』第17号以降は「第〇号」と表記している。

# 別府大学紀要

## 第 6 輯 (1955年)

狂言にあらわれた諷刺	山 本 平一郎
天正年間に於ける豊後耶蘇会学校の建築様式	岡 本 良 知
メタセコイア幼植物の生育と若干の形質 (予報)	二 宮 淳一郎
十万地獄の制禦に関する研究	門 田 弘
ヴァレリイの『秘めた歌』 <i>Ode Secrète</i> をめぐって	吉 村 啓 喜
英国憲法の発達とその永続性	北 沢 佐 雄
聖書文学概観	宮 松 治

## 第 7 輯 (1957年)

宇佐弥勒寺に関する二、三の問題	賀 川 光 夫
歌人佐田秀	大 友 芳 雄
教育史の上より見た女紅場	久多羅木儀一郎
人間関係の統合と管理の科学	斉 藤 守 生
温泉水中の珪酸に関する研究	
第一報 イオン交換樹脂による温泉水中の珪酸の単離	門 田 弘・篠 力
第二報 温泉水中の珪酸の生物学的作用に関する実験的研究	篠 力・門 田 弘

## 第 8 輯 (1958年)

古代説話文学の研究	山 本 平一郎
——批判的庶民文学の形成とリアリズム短篇小説の成立——	
源氏物語における恋愛観	大 石 新
古代文学史の一問題 ——いわゆる「女歌」の発生とその展開——	古 庄 ゆき子
中国古文における指示代名詞此・是兩字の意義の異同について	井 上 寿 老
中国における回民起義の一形態	今 永 清 二
——太平景象前の雲南回民運動について——	
アメリカにおける労働組合と商業資本家	早 川 尚
植物の抵抗性に対する結合水の意義 (綜説)	二 宮 淳一郎
甘藷蔓利用の研究	泉 清
失業対策労働者の食生活	須 東 妙 子

## 第 9 輯 (1959年)

---

日本語の「いふ」を意味する中国古文の動詞	井上 寿老
「言、謂、云、曰」の意義の相違について	
邱濬の思想とその限界に関する一考察	今永 清二
「旅寝論」小考 ——「おととひは」の一句をめぐって——	秦 行正
女子大学生の栄養調査と栄養指導について	山川 逸代
失業対策労務者の食生活	須東 妙子
粉乳製品の酸度に関する研究	仮屋園 璋
聖書の英語 ——山上の垂訓英語研究における——	宮 松治
Lettres à la Fiancée への一考察	金 柿宏典

## 第 10 輯 (1960年)

---

清朝回民政策に関する覚書	今永 清二
——賀長齡、李星沅の雲南回民政策について——	
詩集『秋の木の葉』の憂愁に就いて	金 柿宏典
賞罰の場における集団効果の実験的研究	伊藤 富美
失業対策労務者の食生活 (第三報)	須東 妙子

## 第 11 輯 (1962年)

---

大伴坂上郎女覚え書	古 庄 ゆき子
芭蕉における中世文学の背景 ——西行憧憬の系譜——	秦 行正
太平景象革命の原因に関する一考察	今永 清二
家事労働の社会化に関する思想の発展	坂 本 千恵子
——その一 ロバート・オーエンを中心にして——	
Eugene O'Neill の Strange Interlude の手法についての一考察	福 島 脩
『蝮をつかんで』の憎悪と瀆聖	金 柿宏典
大分県農村の栄養並に食生活の研究 (第4報)	山川 逸代
——蛋白質摂取に関する栄養学的研究——	
つるむらさきの食品学的研究	須東 妙子
食品アミノ酸のペーパークロマトグラフィーによる定量法の改良に関する研究 (第7報)	
久 米 讓・吉 本 日出子・安 達 昌 代	

## 第 12 輯 (1963年)

『阿部一族』小論(上) ——その悲劇性をめぐって——	秦 行 正
中国回民共同体研究に関する一資料 ——清末民国時代の包頭における回民社会の概況——	今 永 清 二
『シックな娘』の愛について つるむらさきの食品学的研究	金 柿 宏 典 須 東 妙 子

## 第 13 輯 (1965年)

源氏物語における光源氏と藤壺との情事について	大 石 新
石川郎女に関する覚え書	古 庄 ゆき子
『阿部一族』小論(下) ——その悲劇性をめぐって——	秦 行 正
咸豊・同治年間の雲南回民運動の近代的性格に関する基礎作業(一)	今 永 清 二
コウルリヂのシェイクスピア講演に関する注釈的研究(一)	小 池 政 雄
Eugene O'Neill の <i>Strange Interlude</i> の手法についての一考察(二)	福 島 脩
「生活革新」と家事労働の問題	坂 本 智恵子
養鶏における「つるむらさき」の給与試験について	須 東 妙 子

## 第 14 輯 (1966年)

『興津弥五右衛門の遺書』覚え書	秦 行 正
回教思想の特性	今 永 清 二
幕末参宮資料の分析 ——農民動向の一面——	後 藤 重 巳
明治初期の国字改革論	高 橋 顕
1910年代における家庭科教育について ——高等小学「理科家事」を中心にして——	坂 本 智恵子
ポール・ヴァレリーの詩「若きパルク」について	井 上 富 江
マタイによる福音書11章25—27節の一考察	菊 池 顕 栄
E・オニール劇にあらわれた女性像の原型としてみた <i>A Wife for a Life</i> の Yvette	福 島 脩
各アミノ酸定量の分析精度について	久 米 讓
栄養改善・生活改善実行グループメンバーの社会的・経済的性格に関する調査研究	東 野 マ サ
養鶏における「つるむらさき」の利用と産卵率について	須 東 妙 子

第 15 輯 (1968年)

——開学二十周年記念特集——

撰閲家と小野宮流	——特に関白頼通と参議資房の場合——	河野房男
泊寺乱入事件の歴史的背景	——内乱期下級武士の動向の一面——	後藤重巳
ブルゴーニュ慣習法の註釈者 (commentateurs) に関するノート		志垣嘉夫
ウィロビー魚譜 Historia Piscium について		高山虔三
珠光の茶道における「ひえかるる」について		大友芳雄
源氏物語における教養観		大石新
甫庵太閤記の研究		嘉部嘉隆
芭蕉連句研究	——貞享五年「粟稗に」の巻——	松本義一
二程子の研究 (一)		高橋正和
貨幣価値一定の公準について		碓氷厚次
アミノ酸のニンヒドリンによる比色定量		久米讓
(食品アミノ酸のペーパークロマトグラフィーによる定量法の改良に関する研究, 第8報)		
Somogyi 法による還元糖の定量について	工藤隆子・野田恵子・久米讓	
セミクロ拡散窒素定量法の分析誤差	清家初子・工藤隆子・久米讓	
冠硬化症とその食餌療法の一考察		須東妙子
農村の生活改善の実行度と改善グループの社会的経済的性格について		東野マサ
1910年代における家庭科教育について		坂本智恵子
——臨時教育会議にいたるまでの女子教育論・家事科教育論を中心にして——		
大分県民の憲法意識 (I)	——主として「65年調査」にもとづいて——	大野保治
Narcisse を主題にした2つの詩		井上富江
——“Narcisse Parle” と “Fragments du Narcisse” に関する覚書		
Shakespeare の作品からみた深層心理学的覚書		島康晴
英語否定文の研究		宮松治
Problème de la civilisation agricole		賀川光夫
à l'époque de Ban (晩) de Jomon (縄文) (1)		
——Technique du safre on pierre (Sekito, 石刀)		

第 16 輯 (1975年)

女紅場の研究(1)	——序説——	坂本智恵子
浦辺村落小考	——その歴史性と地理性の一面について——	後藤重巳
思想家としてのキーツ(1)	——その明晰な知性について——	後藤一美
『キャスターブリッジの町長』についての一考察		
見えの大きさと見えの距離に関する一実験		沖浩子
——恒常刺激と変化刺激の大きさの影響について——		
		山崎晃

Müller-Lyer 錯視に関する発達的研究(1)	山崎 晃
ペーター・カールシュテット「図書館社会学研究」	加藤 一英
——歴史社会学について(1)——	

## 第 17 号 (1976年)

---

古代文学におけるホメロスの伝統(1)	佐藤 義詮
『監郡右置』と『執睨録』 ——近世地方村落支配者の政治志向——	後藤 重巳
漱石の俳句 ——その発展と回帰——	倉田 紘文
唱導文学にあらわれた神 ——安居院流の唱導書を中心にして——	安東 大隆
考古学よりみた古代の中津平野	賀川 光夫
——須恵瓦と百済寺, 長谷寺銅造観音立像の背景——	
女紅場の研究(2) ——市中女紅場を中心にして——	坂本 智恵子
Peire Cardinal(1) ——アルビ十字軍期の詩——	井上 富江
幼児・児童における認知スタイルの分析的研究	山崎 晃
一般生物学における人類の位置	二宮 淳一郎
市販挽肉の細菌汚染に関する研究	末宗 淳二郎
ペーター・カールシュテット「図書館社会学研究」	加藤 一英
——歴史社会学について(2)——	

## 第 18 号 (1977年)

---

近代日本女性史の方法 試論 ——最近の方法論論争によって——	古庄 ゆき子
コンスタンティナ廟堂の北側小アプシスのモザイク	名取 四郎
——「トラディティオ・レギス(法の授与)図」をめぐって——	
井上 靖における万葉集受容	工藤 茂
文学と美	後藤 一美
印象主義の功罪 ——印象主義のフォーヴィズム・キュビズムへの移行——	中込 純次
ヘーゲルにおける精神(1)	佐藤 瑠威
——ヘーゲル精神哲学の現代的意義をめぐって——	
大分県における女教師の形成過程	坂本 智恵子
縄文晩期農耕論についての覚え書	賀川 光夫
野菜類の色素について ——野菜中のカロチンとクロロフィル——	
富田 健二郎・中津留 郁子・三代 生子	
万葉集“七夕の歌一首 短歌を併せたり”(独唱曲)	辛島 武雄

第 19 号 (1978年)

初期キリスト教美術における 「イエルサレム」と「ベツレヘム」の表現について (その1)	名 取 四 郎
森鷗外と口承文芸 ——「百物語」を中心に——	工 藤 茂
寺院本末制度と仏座守	後 藤 重 巳
スパルタクス反乱の評価をめぐって ——特にミシューリン・ウトチェンコ説を中心に——	山 本 晴 樹
明治期・進化論の移植と“定着”	二 宮 淳一郎
女紅場の研究 ——長岡女紅場を中心にして——	坂 本 智恵子
Peire Cardenal (II) ——その詩と精神について——	井 上 富 江
英学再事始——新たなる時代に向けて—— (そのI)「読む」と「解説」とについて	上 田 見 二

第 20 号 (1979年)

江戸末期地方庄屋の蓄財史料の分析	後 藤 重 巳
清少納言の身分意識 ——特に「小白河の八講」の藤原道隆をめぐって——	安 東 大 隆
素十俳句の本質	倉 田 紘 文
神役継承法試考 ——文献史料と民俗資料——	伊 藤 勇 人
初期キリスト教美術における 「イエルサレム」と「ベツレヘム」の表現について (その2)	名 取 四 郎
石川千代松の進化思想 ——その“鶏が先か卵が先か”に関連して——	二 宮 淳一郎
インドネシア・イスラム教育研究序説 ——イスラム教育の近代的革新の意義について——	利 光 正 文
King Lear に現われた“Nature”の解釈について	沖 浩 子

第 21 号 (1980年)

森鷗外「山椒大夫」考 (一) ——その本文校訂について——	工 藤 茂
「封事太宗」と杵築藩法 ——藩法新史料所見——	後 藤 重 巳
中央アジア・トユク遺蹟仏教寺院壁画断片に表現された「宝珠」について	仲 嶺 真 信
国東半島の鬼会面 ——形態による分類(1)——	衛 藤 賢 史
ジェームズ・クラベルの「将軍」に関する考察 ——国際文化交流の立場より—— (英文)	池 永 正
「痛み」を表わす擬態語 (英文)	染 矢 正 一

コーデイリアの死論	沖 浩 子
近代日本女子教育の成立と女紅場	坂 本 智恵子
野菜類の色素について (第2報) ——料理によるクロロフィルとカロチンの変化——	
中津留 郁 子・松 田 加 代・三 代 生 子・富 田 健二郎	
大豆中の銅について	姫 野 朝 子・富 田 健二郎

## 第 22 号 (1981年)

---

初期キリスト教美術における「イエルサレム」と「ベツレヘム」の表現について (その3)	名 取 四 郎
藩政成立期に於ける二・三の問題について	後 藤 重 巳
——豊後岡藩中川氏の事例を中心として——	
国東半島の鬼会面 ——形態による分類(2)——	衛 藤 賢 史
海後宗臣先生の教育学研究について	小 野 潤
サルトルの死と現代哲学の課題	佐 藤 瑠 威
女紅場の研究 ——柏崎その他の地域の勧業女紅場——	坂 本 智恵子
ムベ、アケビの果実について	中津留 郁 子・富 田 健二郎
わが国食品関連教育の考察 ——英国・台湾の事例を通して——	今 戸 正 元
アリオパジチカに見られるジョン・ミルトン思想の残流	池 永 正
——言論・印刷の自由の立場より—— (英文)	
ハーマン・メルヴィルの『レッドバーン』についての一解釈 (英文)	上 田 見 二
日米非言語伝達の比較研究 ——(1)ジェスチュア—— (英文)	染 矢 正 一

## 第 23 号 (1982年)

---

森鷗外「山椒大夫」考 (二) ——その典拠について——	工 藤 茂
滝口武士論 (一) ——詩誌『亜』の時代——	倉 田 紘 文
「終止形を受ける〈見ゆ〉」私見	坂 口 頼 孝
近世末期の辺地農村における社会思潮の一面	後 藤 重 巳
——二点の奇抜な資料をめぐって——	
20世紀前半インドネシアにおけるオランダのイスラム政策	利 光 正 文
——イスラム改革主義問題を中心として——	
ライブラリー・カレッジの研究	安 部 壘 巳
ジョン・ミルトンの文学作品に見られる思想の二元性 (その一) (英文)	池 永 正
『緋文字』覚書 (その一)	安 田 元
Peire Cardenal (Ⅲ) ——その詩と精神の変遷について——	井 上 富 江
九州地方縄文土器の <sup>14</sup> C年代	坂 田 邦 洋

第 24 号 (1983年)

『さんせう太夫』の性格	工 藤 茂
東九州地域の歴史地理性と幕藩体制	後 藤 重 巳
——譜代大名と天領の配置を中心として——	
Dualism of John Milton's Thought	池 永 正
Identified in His Literary Works (Part II)	
『緋文字』覚書 (その二)	安 田 元
John Keats におけるイマジネーションとヴィジョン	後 藤 一 美
『白いジャケット』私見 (その一)	上 田 見 二
九州産黒曜石からみた先史時代の交易について (II)	坂 田 邦 洋
大学における図書館学教育の位置 ——現状と問題点——	佐 藤 允 昭

第 25 号 (1984年)

——学長・佐藤義詮教授喜寿記念号——

井上 靖「通夜の客」の位置	工 藤 茂
芥川龍之介「南京の基督」論	栗 栖 真 人
尚友学会と私学教育 ——藩校の解体と明治初期教育の一面——	後 藤 重 巳
三葉環頭大刀の一例	坂 田 邦 洋
『緋文字』覚書 (その三)	安 田 元
詩と人生批判——アーノルドの批判精神——	後 藤 一 美
長期的前置詞の誤謬に関する一分析方法	染 矢 正 一
英語学習における八つの基本的分野の相関性について	F.W.フェラッシー・染 矢 正 一
大分県丹生台地発見のキリシタン遺物	賀 川 光 夫
「失楽園」の文体の一断面 ——Allのイメージについて——	池 永 正
低圧・低酸素による stress が認知的葛藤に及ぼす影響	川 瀬 泰 治

第 26 号 (1985年)

中古日記にみえる、唱導儀式と、そのうけとり方 (其1)	安 東 大 隆
——『中右記』にみえる、中陰の形——	
鬼の岩屋第2号墳の壁画について	坂 田 邦 洋・副 枝 幸 治
Dualism of John Milton's Thought	池 永 正
Identified in His Literary Works (Part III—A)	
沙翁のことども (その一) ——『ハムレット』のこと——	安 田 元

分節音素と誤聴の関係について	染 矢 正 一・Frederick W.FERRASCI
アニー・パイルとその作品「沖縄戦記」	足 立 富 美
ケインズと同時代の経済学者	齋 藤 事

## 第 27 号 (1986年)

---

近世期における村荒廃と善行指導	後 藤 重 巳
鬼の岩屋第一号墳の壁画について	坂 田 邦 洋・宇都宮 英 二・遠 藤 和 幸
Dualism of John Milton's Thought Identified in His Literary Works (Part III—B)	池 永 正
『白鯨』覚書(その3)	安 田 元
Scott Fitzgeraldの短篇小説論 ——“Winter Dreams”をめぐって——	足 立 富 美
Peire Cardenal et l'a mour courtois	井 上 富 江
九州に於けるナイフ形石器文化の地域性	橋 昌 信

## 第 28 号 (1987年)

---

独歩「春の鳥」考	工 藤 茂
安居院流唱導の範囲 ——その対機の多様性について——	安 東 大 隆
近世期における林野行政と資源利用	後 藤 重 巳
出島和蘭商館跡の調査	坂 田 邦 洋
現代思想としての近代主義 ——その人間像の現代的意義をめぐって——	佐 藤 瑠 威
沙翁のことども(その二) ——『オセロウ』とメルヴィルの『ビリー・バッド』——	安 田 元
S. Fitzgerald 短篇論, (その二) “Ice Palace” と南北戦争後遺症	足 立 富 美

## 第 29 号 (1988年)

——佐藤義詮学長追悼号——

---

佐藤義詮先生を思う	賀 川 光 夫
「轆角庄」故事の構造 ——中国雲南省大野地方の白族の炭焼長者譚——	工 藤 茂
今昔物語集における「人びと」その他	坂 口 頼 孝
菱竿検地史料の所見	後 藤 重 巳
豊国の屯倉について	森 猛
国東塔について ——韓国の浮屠との関係——	坂 田 邦 洋

ワーズワースの詩魂形成 ———幼年期について———

後藤 一 美

第 30 号 (1989年)

教育にみる「教」と「育」の形成について

阿部 義 郎

ヨーロッパのニヒリズム ———その問題の普遍史的意義について———

佐藤 瑠 威

山口誓子論 ———句集『凍港』と詩誌「亜」———

倉田 紘 文

鏡師陳是と神獣文飾の源流

王 金 林・賀川 光 夫

近世期宇佐社の神事と島原領

後藤 重 巳

付加疑問について ———性差の研究から———

岩本 光 世

北九州地域産白亜紀花崗岩類の放射年代に関する2, 3の新資料

村上 允 英

第 31 号 (1990年)

『栄華物語』にみえる法華八講

安東 大 隆

国東塔の研究 ———鳩摩羅什の舍利塔———

坂田 邦 洋

戦後日本映画にみる“原作”について ———その質と量の問題———

衛藤 賢 史

西日本の土偶出現期と土偶の祭式

賀川 光 夫

前期量子論における自然放出と輻射力の問題

今野 宏 之

『弁明批判』研究

黒田 健二郎

東ジャワの初期ムハマディヤ運動に関する研究

利光 正 文

第 32 号 (1991年)

福田正夫詩受容の変遷

工藤 茂

行書の領域私考 ———行書とは何か———

荒金 信 治

江戸期の家意識 ———遺言書四点から———

後藤 重 巳

小説と映画における『海と毒薬』

衛藤 賢 史

マッスの骨格について ———高崎山ニホンザルB群6代目ボス———

坂田 邦 洋

Fin amor des Troubadours ———Celui de Folquet de

井上 富 江

Marseille en comparaison de Bernard de Ventadour———

近代中国外交と中国社会の近代化

石 源 華

## 第 33 号 (1992年)

- 「曠野」論覚書 ——女の「不為合せ」と末尾の文章をめぐって 山本裕一  
江戸時代初期における耕地の存在様態 ——豊後岡藩柏原組の一例—— 後藤重巳  
教職課程をめぐる諸問題 昭和六一年——平成三年を中心に 阿部義郎  
自閉症児の情緒と環境要因について 川瀬泰治  
パソコンを用いた AC/DC コンバータ回路の解析 岩崎俊臣  
縄文時代の漁撈活動に関する研究 ——クロダイの体長組成——  
坂田邦洋・野口圭美・渡名喜令子  
FINDING OF A-TYPE GRANITOIDS FROM OUTER 村上允英・今岡照喜  
ZONE OF SOUTHWEST JAPAN  
BEAT TO THE BONE : The darker side of Kerouac Raymond Steiner  
Amplitude, Pitch, and Duration of the Vowels in English Words 小松雅彦  
——A Pilot Experiment Comparing Emphatically Pronounced  
Words with Naturally Pronounced Ones——

## 第 34 号 (1993年)

- 杉田久女の俳句 ——ノラの背景—— 倉田紘文  
雁塔聖教序建立の経緯 荒金信治  
近世後期の村継ぎをめぐる問題 後藤重巳  
〈資料紹介〉  
「宇佐宮記」考証 (一) ——解題と翻刻—— 伊藤勇人  
曾畑式土器の研究 ——韓国岩寺洞遺跡の櫛文土器—— 坂田邦洋  
SHELLEY'S "ADONAI" AS A PASTORAL ELEGY(1) 城戸照文  
Les premières critiques littéraires 井上富江  
——Les troubadours critiqués par Peire d'auvergne et Moine de Montaudon——

## 第 35 号 (1994年)

- 独歩における佐伯 工藤茂  
大伴坂上郎女論 ——その位置づけをめぐって—— 古庄ゆき子  
不空訳「仁王護國般若波羅蜜多經」小考 友永植  
『廢市』 ——小説のイメージの映像化への試み—— 衛藤賢史  
日本における〈近代の超克〉問題 佐藤瑠威  
縄文時代の魚撈活動に関する研究 ——マダイの体長組成——  
坂田邦洋・塩地努・郷司久美香

THE MISTRANSLATION OF “ WA ” THROUGH CHRISTIAN AMERICAN PERCEPTIONS

アンジェラ・バーネット

SHELLY'S “ ADONAI ” AS A PASTORAL ELEGY(2)

城戸 照文

第 36 号 (1995年)

後期堀文学の方向性についての一考察 ——「菜穂子」の「眼ざし」を手掛かりにして——	山本 裕一
助辞「とて」の成立過程・意味用法をめぐって (一)	森脇 茂秀
「宇佐宮記」考証 (二) ——出典の探索——	伊藤 勇人
カール・レーヴィットと戦後日本の「近代主義」 ——近代の超克問題をめぐって——	佐藤 瑠威
関係発達論としての自閉症研究	川瀬 泰治
賀来飛霞の『由布嶽採葉図譜』考	荒金 正憲
AN ANALYSIS OF THE INTONATION OF ‘ SABRINA ’ BY D.BOLINGER'S PROFILES (1)	森 正己
ささやき声における有声と無声の識別 ——語頭破裂音の日英比較—— 小松 雅彦・井上 智美・木部 清美	山本 晴樹
Les sévirs augustaux et les villes en Gaule romaine sous le Haut Empire 臼塚古墳出土の人骨	坂田 邦洋

第 37 号 (1996年)

里見淳「姥捨」考	工藤 茂
浄土宗の蛇(龍)身濟度譚の背景 ——『新御伽婢子』を手がかりに——	後小路 薫
「宇佐宮記」考証 (三) ——類書の検討——	伊藤 勇人
宋都監探原考 (一) ——唐代の行營都監——	友永 植
レーヴィットと近代(1) ——ヘーゲルの宥和の意味——	佐藤 瑠威
鄭振鐸の目録学と“搶救民族文献”	工藤 一郎
Perception of Voicing in English and Japanese Whispered Plosives	小松 雅彦
How Culture Effects Manufacturing in Japan and the U.S.	Joe BARNETT
Les inscriptions relatives aux sévirs augustaux, découvertes dans la campagne de Nîmes	山本 晴樹
「借地借家」法制の潮流と転機Ⅱ	時枝 宏寿
文科系大学における情報処理教育の改善の取り組み 塔の大きさについて	岩崎 俊臣・西村 靖史 坂田 邦洋

## 第 38 号 (1997年)

- 幕末期京都情報の流布をめぐって 後藤重巳  
「宇佐宮記」考証(四) ——類書の検討—— 伊藤勇人  
自閉症児における常同行動の意味について 川瀬泰治  
AN ANALYSIS OF THE INTONATION OF 'SABRINA' BY D.BOLINGER'S PROFILES (2) 森正己  
Max ROUQUETTE Comme Successeur des Troubadours 井上富江  
弥生人足跡の人類学的研究 坂田邦洋  
女子柔道選手の傷害に関する研究 ——大学生を中心として—— 阿部謙之  
ディルタイの精神科学における「主体 (Subjekt)」の問題について 瀬戸口昌也  
——教育における「主体性」とは何か? ——  
大学における図書館情報学教育の変化 ——1977年と1993年の比較分析—— 佐藤允昭

## 第 39 号 (1997年)

- 妹をまねく屋戸 ——田村大嬢のうたを考える—— 浅野則子  
ト甲骨制作方法における実証 ——甲骨を覆う脂ぬきについて—— 荒金信治  
自閉症における自己と他者 川瀬泰治  
近世末期豊後日田周辺農村の物流 ——楮皮の他所売り史料から—— 後藤重巳  
「宇佐宮記」考証(五) ——著者の探索—— 伊藤勇人  
レーヴィットと哲学 佐藤瑠威  
AN ANALYSIS OF THE INTONATION OF 'SABRINA' BY D. BOLINGER'S PROFILES (3) 森正己  
《SERVI VICAR II》再考 馬場典明  
——ローマ帝政初・中期における奴隷制の構造——  
足の研究(3) ——ベトナム・キン族の足—— 坂田邦洋  
「シテ形接続」をめぐって ——付帯状態のシテ節—— 中野はるみ

## 第 40 号 (1998年)

- 堀辰雄「姨捨」考 工藤茂  
想定された至福 ——大伴坂上大嬢の歌をめぐって—— 浅野則子  
『更級日記』考 ——孝標女の不幸意識—— 安貞淑  
「宇佐宮記」考証(六) ——本書成立の背景—— 伊藤勇人  
Voyage dans l'autre monde 井上富江  
——comparaison de "Urashima-Tarô" avec les lais bretonset les romans en France

日本におけるサー・トマス・ブラウン書誌	河野 豊
文化財建造物の景観保護について	中村 賢二郎
元首政期ローマ帝国西部の皇帝礼拝	山本 晴樹
——ガリアのアウグスターレースを手がかりに——	
足の研究 ——メコンデルタの住民——	坂田 邦洋
カール・レーヴィットの批判精神	佐藤 瑠威
テオドル・ドイプラーとヴァルデマール・ヨロス	宮下 誠
——パウル・クレーとシュルレアリスム前史(1)——	
ディルタイの教育学と哲学 ——生の解釈学としての陶冶論——	瀬戸口 昌也
主節とシテ節の意味的關係	中野 はるみ

### 第 41 号 (1999年)

---

あゆひ抄のことだま説について	佐田 智明
歌の誘惑	浅野 則子
『蜻蛉日記』考 ——兼家の来訪の表現——	安 貞淑
「宇佐宮記」考証 (七) ——本書成立の諸段階——	伊藤 勇人
『嵐が丘』における「所有」の観念	河野 豊
ドイツにおける歴史的旧市街の景観保護と保存修復	中村 賢二郎
——マイセン、パッサウ、ボンの手続きと手法——	
足の研究 ——タイ人の足——	坂田 邦洋
カール・レーヴィットと丸山真男(1) ——批判精神の二つの形——	佐藤 瑠威
レオポルト・ツァーンとヴィルヘルム・ハウゼンシュタイン	宮下 誠
——パウル・クレーとシュルレアリスム前史(2)——	
生の哲学の「二重の顔 (Doppelantlitz)」の問題	瀬戸口 昌也
——ディルタイの哲学的思考の特徴について——	

### 第 42 号 (2000年)

---

知覚される季節	浅野 則子
『蜻蛉日記』考 ——兼家の魅力——	安 貞淑
「宇佐宮記」考証 (八) ——編者到津公著の事蹟 (その一) ——	伊藤 勇人
自閉症児の自我形成…事例研究	川瀬 泰治
『キュロスの庭園』の歴史性	河野 豊
文化財学試論 ——学の構築のための若干の視点——	中村 賢二郎
1 世紀後半 ——2 世紀初のイタリア大土地所有制	馬場 典明
——ローマ『農書』の再検討——	
情報教育システムの改善	岩崎 俊臣

足の研究 ——インド人の足——	坂田 邦洋
社会学における歴史主義的意識の位置 (上)	松森 武嗣
カール・レーヴィットと丸山真男(2) ——学問と政治——	佐藤 瑠威
1939年開催の「柏林日本古美術展」をめぐる2点の日本絵画	安松 みゆき
自然休養村の展開と地域の特徴	中山 昭則
熊本の自閉症児療育学生ボランティア活動の歩み	
	篠崎 久五・一門 恵子・服部 陵子
	鳥岡 信孝・河田 将一・天津 透彦
日本語学習者による「のだ」文の理解	石井 容子

### 第 43 号 (2001年)

---

「悲恋」の構造	浅野 則子
「エッセイ」の「発見」とサー・トマス・ブラウン	河野 豊
埋蔵文化財保護制度に関する立法論的考察	中村 賢二郎
足の研究 ——タイ北部、山岳民族の足——	坂田 邦洋
ドイツの市町村におけるプラヌムクスツェレの実施	篠藤 明徳
——メアブッシュ市(都市開発)とノイス市(中心市街地)の事例——	
社会学における歴史主義的意識の位置 (下)	松森 武嗣
学生の体力・スポーツに関する意識調査 阿部 謙之・賀来 翼・阿部 淳	
美術史家上野直昭とベルリンの「日本研究所 Japaninstitut」の活動をめぐって	安松 みゆき
感性的認識に関する教育学的考察	石村 秀登
——感覚的知覚と形態・振る舞い・ことば——	

### 第 44 号 (2002年)

---

共有される心	浅野 則子
万病に苦しむ書聖王羲之考	荒金 大琳
大分方言における可能表現調査の中間報告	松田 美香
L'EMANCIPATION DE LA FEMME ROMAINE	Michel GAYRAUD
足の研究 ——タイ北部、カレン族の足——	坂田 邦洋
ドイツの「東亜美術協会 Die Gesellschaft für ostasiatische Kunst」	安松 みゆき
(1929年～1942年)にみる日本美術の研究動向	
学習塾の経営と教育 ——N学習塾を事例として——	松森 武嗣
教育学の解釈的基礎づけの可能性について	瀬戸口 昌也
——認識論的方法論的基礎づけか、基礎存在論的基礎づけか?——	
ドイツにおける事実教授(Sachunterricht)について	石村 秀登
——その展開と教育学的基礎づけ——	

第 45 号 (2003年)

---

希求像としての光子	浅野 則子
可能表現の変遷 ～大分郡挾間町の3世代～	松田 美香
Tennessee Williams の <i>Kingdom of Earth</i> について	山野 敬士
——欲望の形而上学——	
足跡の研究 —— 椿山古墳の築造に関する研究 ——	
	坂田 邦洋・益永 浩仁・竹下 博子
肥前国大村城修補許可の老中奉書について	白峰 旬
——大村市立史料館所蔵史料の史料調査より——	
高校女子柔道選手の傷害に関する研究	阿部 謙之・山中 圈一・阿部 淳
雑誌『YAMATO』にみる日本美術研究	安松 みゆき
解釈学的論理学 (hermeneutische Logik) とレトリック	瀬戸口 昌也
——精神科学の基礎づけに対するレトリックの可能性について——	
食物栄養系女子学生の喫煙に関する研究	中嶋 加代子・手島 香織
——喫煙習慣の実態および喫煙が栄養調理に及ぼす害の認識度——	

第 46 号 (2005年)

---

集約する心 —— 家持の歌の場 ——	浅野 則子
Tennessee Williams と1960年代	山野 敬士
実験的演劇としての <i>The two-Character Play</i>	
豊後国臼杵城修補許可の老中奉書について	白峰 旬
——大分県立先哲史料館所蔵史料の史料調査より——	
R. ローティにおけるポストモダン	松森 武嗣
R. ローティにおける連帯の意味	松森 武嗣
第一次大戦期のドイツ人の俘虜生活と美術活動	安松 みゆき
——日本美術史家および版画家フリッツ・ルムプフと大分収容所の場合——	
木に託した人々の夢とヴィジョン —— トリスタン伝説の場合 ——	井上 富江
モンペリエ第三大学教授ジョージアンヌ・マス氏の公開講座と CD ROM <i>Cantor &amp; Musicus</i> について	井上 富江
保存条件の違いによる緑茶葉の成分含量の変化について	
	神戸 保・島津 (生田) 統子・平野 朋子
事実教授 (Sachunterricht) の認識論的考察	石村 秀登
——ヴァーゲンシャインの教授学を手がかりに——	

## 第 47 号 (2006年)

## 論 文

- エコ・ツアーとしての遺跡観光 ——メキシコ、カラクムル遺跡の事例—— 佐藤 孝 裕  
 高校入試制度改革の影響力 ——受験生を中心に—— 松 森 武 嗣  
 第二次世界大戦中の日独双方による日本のイメージ戦略の一考察 安 松 みゆき  
 ——日本美術史家フリッツ・ルムプフの活動をとおして——  
 K. マルクスの疎外論 ——マルクスとハイデッガー(1)—— 秋 田 清  
 デルタイの教育学とナラトロジー (Narratologie) 瀬戸口 昌 也  
 ——ミッシュ・ブルーナー・リクールを手がかりに——  
 茶葉からの緑茶浸出条件と浸出液中の成分量  
 神 戸 保・島津 (生田) 統子・平 野 朋 子  
 カボス果皮粉末食投与がラットの成長および血清成分に及ぼす影響  
 安房田 司 郎・神 戸 保・浅 田 憲 彦・岩 本 佳 子・江 崎 一 子

## 研究ノート

- ヨダキーイズムをめぐって ——大分方言ヨダキーの意味—— 松 田 美 香  
 江戸時代中後期における老中就任者とその在任期間について 白 峰 旬  
 浄瑠璃『壺坂霊験記』における詞章の成立 細 田 明 宏

## 第 48 号 (2007年)

## 論 文

- 蔵鋒と露鋒 …啓功先生の書の用筆法を中心にして 荒 金 大 琳  
 再生される空間 ——三組の高円歌群をめぐって—— 浅 野 則 子  
 自閉症者の社会生活 川 瀬 泰 治  
 大分方言における可能表現の地域差・世代差 松 田 美 香  
 ——通信調査の結果および考察——  
 サー・トマス・ブラウンと夏目漱石 ——『三四郎』をめぐって—— 河 野 豊  
 K. マルクスの疎外論と物象化論 秋 田 清  
 ——マルクスとハイデッガー (2-1) ——  
 デルタイとリクール 瀬戸口 昌 也  
 ——精神科学 (Geisteswissenschaft) と物語論 (Narratologie) との接点  
 Bernard Malamud の小説における父と息子 三重野 佳 子  
 ——初期短編から *The Assistant* へ——

研究ノート

老中就任者についての基礎的考察	白 峰 旬
ドイツ近代の女流画家 ツェツィーリエ・グラーフ・プファフの作品リスト 油彩・テンペラ・水彩の作品	安 松 みゆき
大分は戦犯県か	辻 野 功
10代と20代の若者を対象としたこねぎに関する意識調査	西 澤 千恵子・江 崎 一 子

第 49 号 (2008年)

論 文

中国文物出版社出版後の雁塔聖教序における考察	荒 金 大 琳
北原人形芝居における一人遣い操法「はさみ遣い」の成立	細 田 明 宏
自閉症者における社会的交流の本質について	川 瀬 泰 治
大分県日田市方言の可能表現 ～通信調査結果による世代差・地域差～	松 田 美 香
慶安元年の丹波福知山城主稲葉紀通自決事件(謀反疑惑事件)に関する一考察	白 峰 旬
民法716条立法趣旨と参照英判例	高 友 希 子
ベルリンとミュンヘンにおける日本美術観と蒐集機関	安 松 みゆき
K・マルクスの物象化論 マルクスとハイデッガー(2 2)	秋 田 清
環境保全と生活の知	長 尾 秀 吉
低栄養状態に影響を及ぼす要因の検討	星 野 隆
成長期スポーツ選手の身体組成、食生活習慣および栄養素等摂取状況の現状と課題	平 川 史 子・吉 村 良 孝
小規模組織におけるデジタルアーカイブのための情報収集・発信モデルの展開 シンプルな手順による機関リポジトリのデザイナー	石 井 保 廣

研究ノート

豊後臼杵藩旧蔵の城絵図群に関する一考察 『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』の内容検討より	白 峰 旬
施設における対人援助職の孤立について	三 城 大 介
重光葵 一貫して平和を探求した外交官・外相	辻 野 功
大分県における郷土料理の認知度 家族形態による違い	西 澤 千恵子・中 村 佳 織・高 橋 里 枝

# 別府大学研究報告

創 刊 号 (1971年)

二程子の研究	高 橋 正 和
近世中、末期邊地農村と土地移動をめぐる諸問題 ——特に豊後国東地方の一例——	後 藤 重 巳
ハーゼイ作品の色彩語分析	沖 浩 子
ワーズワースの詩に於ける諸問題点試補	後 藤 一 美
発育形態の総合的把握の試み ——logitudinal な資料による growth potential のとらえ方	高 橋 実 子
職業興味と職業適性との相関についての一研究	中 邑 平八郎
<i>The Egoist</i> における Meredith の特質	酒 井 健治郎
臨時教育会議以後の女子教育論・家事科教育論について	坂 木 智恵子
小児期の肥満について (第1報) ——別府市の乳児について——	本 莊 延 子
進行性ジストロフィー症の臨床的研究	豊 田 幸 子・秋 吉 美佐子
とくにその栄養学的問題点について (第1報)	
養品中の有機酸について	片 岡 千鶴子・工 藤 隆 子・清 家 初 子・久 米 讓
セミマイクロ拡散分析による二酸化炭素の定量 (拡散分析の食品学への応用V)	清 家 初 子・生 野 郁 子・久 米 讓

※『別府大学研究報告』は、1971年に当時の若手教員を中心として、創刊号が刊行されたが、その後続刊されず、創刊号が存在するのみである。